

2018 年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏 名
人間健康学部 人間健康学科	助教	木野村 嘉則
最終学歴	学 位	専 門 分 野
筑波大学大学院体育科学研究科 スポーツ科学専攻修了	修士 (体育学)	体育方法学

I 教育活動

○目標・計画

(目標)

スポーツを指導する立場となるための基礎知識を教授し、指導者としての態度を育成する。この際には、建学の精神である「真に信頼して事を任せうる人格の育成」が重要となること理解させる。特に専門演習に際しては、興味があるテーマを見つけ、論理的な問題解決を行えるように指導し、校訓の「真面目」にあるように真摯に取り組み結論まで書きあげることにより成長を実感させる。

(計画)

講義では、スポーツのコーチングやトレーニングに関する実践に関する事例を用いながら、学生が理論について具体的なイメージを持てるよう工夫する。また、ミニツツペーパーなどを用いたフィードバックをさらに促していく。また、課題の量を変化させることなく、課題の種類を増やし、より多様な学習機会を提供する。

演習では、自ら考え情報収集し行動する資質を高めること促し、収集した情報から意見を作り上げ他者に伝えることに取り組む。その際には、学生が自ら興味を持つようなテーマや内容について解決することをサポートする。また、チームにて課題に取り組めるよう、お互いの取り組みに興味を持てるよう工夫する。そして、よい計画を立てて、着実に実行していくことで得られる成果が大きいことを実感できるよう取り組む。昨年度のゼミ生の研究成果の抄録をテキストとして用いることで、道筋をイメージしやすくするとともに、達成できるという実感を持たせたい。

○担当科目 (前期・後期)

(前期) トレーニング科学、コーディネーショントレーニング演習、コーチング論、スポーツ実習、総合演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

(後期) 専門スポーツ実習(陸上競技)、総合演習Ⅱ、専門演習Ⅳ、卒業研究、体育科教育法(3回分)

○教育方法の実践

学生の理解を深めるために、図や動画を含みつつ事例を盛り込んだ教材を作成した。そして、授業で用いる資料については学生が予習・復習に使用できるようにメーリングリストを用いて事前に共有した。

講義科目では授業の最初に本時の課題レポートを提示し、授業の終わりに提示した課題を解けるようになることを求めた。このことで授業の焦点が明確になることを意図した。また、課題を用いて次の授業にて前時の復習を行い、知識の定着を狙った。また、授業内容について質問を収集し、次の授業での開設に用いた。

演習科目では、知識の定着、知識を基にした自身の考えの構築、考えの伝達ができることを重点に置き、プレゼンテーション資料の作成・発表の機会を設けた。特に専門演習では、希望者に学外にてプレゼンテーションやディスカッションを行い、多様なフィードバックが得られるように

した。総合演習ではレポートを構成する章立てやそこで求められる内容について説明しながら、最初に既にかき上げているレポートの構成や内容について評価した。次に、学生ごとに調査のテーマ設定を行い、調査報告書を作成しながらレポート作成のフィードバックを学生の相互評価と教員による評価によって行った。

実習科目では、日々の取り組みの振り返りとともに、学習テーマごとにまとめたレポート作成とレポートに関するフィードバック資料による振り返りを行った。また、実習で作成したレポートが特に教職課程の学生にとっては次年度以降の教職課程科目にて資料となるよう配慮した。

○作成した教科書・教材

それぞれの授業内容に関連した専門図書、学術論文、動画をベースにオリジナルの教材を作成した。レポートに際しては、フィードバックを円滑に行えるように工夫した。

専門演習にて前年度のゼミ論文の抄録集をテキストとして用いるとともに、論文の読み方に関するドリル形式のワークを作成した。

○自己評価

講義科目および実習科目では事後のアンケートにて復習の時間に知識の定着ができたか、解説が興味深いかを確認したところ一定の手ごたえを得たため、今後も継続していきたい。レポートやプレゼンテーション資料の作成に際しても、適宜フィードバックをかけながら行うことで学生の進捗に良い影響を与えたと思う。一方で、特に卒業研究作成に際したループリク評価の作成を目指したが、こちらは今年度未達成となってしまった。次年度以降の課題としたい。

II 研究活動

○研究課題

跳躍選手の踏切動作の変容

○目標・計画

(目標)

跳躍選手が行う踏切について、各種ジャンプ運動時の踏切動作や力発揮の特徴を明らかにする。

(計画)

トレーニング時のデータ収集を行う。特に一般的に練習で用いられるジャンプ運動時の地面への力発揮の特徴を、種目の差および競技力の差、競技力向上時の変化に着目してまとめる。

○2011年4月から2019年3月の研究業績(特許等を含む)

(著書)

- ・尚爾華, 澤田節子, 谷村祐子, 肥田幸子, 中野匡隆, 木野村嘉則. 「指導者がもつ健康の運動指導上の位置づけ—高齢者と青少年対象の指導者の事例をとおして」第6章『長寿社会を生きる—地域の健康づくりをめざして』唯学書房, pp, 100-116, 2017.

(学術論文)

- ・相川悠貴, 木野村嘉則, 兼安真弓. 2型糖尿病モデルラットの糖代謝異常発現に対する田七人参摂取と運動の効果. 紀要, Vol. 66, pp. 1-8, 2018.
- ・木野村嘉則, 木下達生, 波戸謙太, 葛原憲治. 野球における二塁までのベースランニング時の走塁コースの分類に関する試案: 中学生及び高校生による自由走路疾走条件を事例として. 東邦学誌, Vol. 46 (2) pp. 93-104, 2018.
- ・西村三郎, 木野村嘉則, 松崎鈴, 松下翔一, 池田延行. 小学校高学年児童を対象とした走り幅跳びにおける助走歩数が跳躍距離に与える影響. 国士舘大学体育研究所所報, Vol. 36, pp. 35-42, 2017

- ・西村三郎, 木野村嘉則, 小林育斗, 松崎鈴, 松下翔一, 池田延行. 小学校高学年児童を対象とした走り幅跳びの体育授業における学習成果の検討: より大きな鉛直速度を獲得できる踏切は学習可能か? 体育学研究, Vol. 62 (2), pp.647-663, 2017.
- ・藤林献明, 木野村嘉則, 関子浩二. ジュニア男子アスリートを対象とした Rebound Long Jump Test と疾走及び水平跳躍能力との関係. びわこ成蹊スポーツ大学研究紀要, Vol. 14, pp.105-114, 2017.
- ・古市直樹, 鎌田公寿, 木野村嘉則, 小嶋季輝. 教室環境における共同注視に関する共同分析による試論. 琉球大学教育学部紀要, Vol. 90, pp.9-26, 2017.
- ・鎌田公寿, 木野村嘉則, 小嶋季輝. 小学校道徳教育において育まれるケアの実際—理論的枠組みを用いて抽出・分析した2事例の比較検討を通して—. 未来教育研究所紀要, Vol. 4, pp.5-14, 2016.
- ・鎌田公寿, 木野村嘉則, 小嶋季輝. 小学校道徳教育における「ケアされる人」の発達動態—子どもの主観に着目した調査に基づいて—. 琉球大学教育学部紀要, Vol. 88, pp.257-266, 2016.
- ・古市直樹, 鎌田公寿, 木野村嘉則, 小嶋季輝. 教室場面における共同注意の分析方法に関する試論. 東邦学誌, Vol. 45, No. 1, pp.29-47, 2016.
- ・鎌田公寿, 木野村嘉則, 小嶋季輝. 「ケアされる人」がケア主体へと発達する契機を分析するための枠組み: 道徳教育における Noddings 理論の援用妥当性を論点として. 琉球大学教育学部紀要, Vol. 87, pp.113-120, 2015.
- ・鎌田公寿, 小嶋季輝, 木野村嘉則. 道徳教育におけるケア場面を抽出するための枠組みの構築—Noddings の理論に依拠して—. 東邦学誌, Vol. 44, No. 1, pp.71-86, 2015.
- ・藤林献明, 荻山靖, 木野村嘉則, 関子浩二. リバウンドロングジャンプテストの遂行能力からみた水平片脚跳躍において高い接地速度に対応するための踏切動作. 陸上競技学会誌, Vol. 12, pp.33-44, 2014.
- ・藤林献明, 荻山靖, 木野村嘉則, 関子浩二. 水平片脚跳躍を用いたバリスティックな伸張—短縮サイクル運動の遂行能力と各種跳躍パフォーマンスとの関係. 体育学研究, Vol. 58, No. 1, pp.61-76, 2013.
- ・坂口将太, 天野秀哉, 木野村嘉則, 大島雄治. 幼児における発育を考慮に入れた運動能力発達評価の試み—認定付属こども園の幼児を対象として—. 茨城キリスト教大学紀要. II, 社会・自然科学, Vol. 46, pp.273-280, 2012
- ・木野村嘉則, 村木征人, 関子浩二. 走幅跳における助走歩数を増やして踏切るための踏切動作: 短助走跳躍から長助走跳躍に至る踏切動作等の変化率に着目して. 体育学研究, Vol. 57, No. 1, pp.71-82, 2012.
- ・木野村嘉則, 森信二. ジュニア走幅跳選手における助走歩数が跳躍距離, 助走速度, 踏切時間に及ぼす影響. 茨城工業高等専門学校研究彙報, Vol. 46, pp.105-111, 2011.

(学会発表)

- ・熊野陽人, 下嶽進一郎, 木野村嘉則, 東中友哉, 松尾彰文. 走幅跳の助走において選手の感覚とデータは一致するのか?—各歩の助走速度と接地時間に着目して—. 日本陸上競技学会大会第17回大会, p.28, 2018
- ・木野村嘉則, 下嶽進一郎, 熊野陽人, 松尾大介, 越川一紀, 松尾彰文. プライオメトリクストレーニングにおける力発揮特性の経年変化~自己記録を向上させた選手の特徴~トレーニング科学, Vol.30(3), p.173, 2018
- ・Yoshinori Kinomura, Natsuki Sado. Case study of the effect of high-intensity intermittent

- exercise on the distance traveled during high-speed running in a football game. 2018 KNSU International Conference - Asia-pacific Conference on Coaching Science - Constructing a happy sport field of future generations. pp.76-77, 2018
- Saburo Nishimura, Yoshinori Kinomura, Shoichi Matsushita, Rei Matsuzaki, Nobuyuki Ikeda. Influence of approach distance of long jump on jump characteristics of 5th graders. 2018 KNSU International Conference - Asia-pacific Conference on Coaching Science - Constructing a happy sport field of future generations. pp.132-133, 2018
 - 小島正憲, 葛原憲治, 木野村嘉則. 初心者の倒立における評価指標の提案. 日本体育学会大会予稿集, Vol. 68, p. 235, 2017.
 - 波戸謙太, 木野村嘉則. 野球初心者の全力投球からみたスピードトレーニングの適正反復投球数, 日本体育学会大会予稿集. Vol. 68, p. 235, 2017.
 - 木野村嘉則, 波戸謙太. 全国高校野球選手権において無死1塁場面で用いられた攻撃戦術の分析, 日本体育学会大会予稿集. Vol. 68, p. 235, 2017.
 - Nobuaki Fujibayashi, Mitsuo Otsuka, Yoshinori Kinomura, Shota Sakaguchi, Tadao Isaka. Coaching method of triple jump takeoff in frontal plane movement-Evaluation using side-inverted pendulum model. The 2015 International Conference for the 35th Anniversary of the Japanese Society of Sport Education and The 4th East Asian Alliance of Sport Pedagogy Conference, Vol. 60, p. 63, 2015
 - Yoshinori Kinomura and Nobuaki Fujibayashi. Analysis of the takeoff motion in long jump and high jump among students-High jump for learning to takeoff powerfully in long jump-The 2015 International Conference for the 35th Anniversary of the Japanese Society of Sport Education and The 4th East Asian Alliance of Sport Pedagogy Conference, Vol. 60, p. 62, 2015.
 - 木野村嘉則. 一般男子大学生の走幅跳における踏切動作と技術的課題の検討, 日本スポーツ教育学会第34回大会号 p. 21, 2014.
 - Yoshinori Kinomura, Nobuaki Fujibayashi, Koji Zushi. The changes in the long jump takeoff as increasing the number of step during the approach run. The 1st Asia-Pacific Conference on Coaching Science, 2014.
 - Yoshinori Kinomura, Nobuaki Fujibayashi, Koji Zushi. Characteristics of the long jump take-off as the novice increases the number of steps in the approach run. The 6th Asia-Pacific Conference on Sports Technology, Proceedia Engineering, Vol. 60, pp. 313-318, 2013
 - 藤林献明, 荻山靖, 木野村嘉則, 関子浩二. 身体の屈伸運動と回転挙動からみた水平加速型跳躍と水平減速型跳躍の特性. 第25回日本トレーニング科学会大会号, p. 85, 2012.
 - 木野村嘉則, 藤林献明, 関子浩二. 一般学生を対象にした走幅跳授業における助走歩数の設定と指導法. 第25回日本トレーニング科学会大会号, p. 93, 2012.
 - 仲田愛, 木野村嘉則, 関子浩二. 女子棒高跳選手における競技史およびトレーニング史に関するコーチング学的研究~4m23までの記録を高めた女子選手の実践事例を手掛かりにして~. 日本コーチング学会第23回大会号, 71-72, 2012
 - Yoshinori Kinomura, Koji Zushi. Kinematics of the long jump take-off for increasing steps of approach run. The 5th Asia-Pacific Conference on Exercise and Sports Science, 2011.

- ・木野村嘉則, 村木征人, 関子浩二. 走幅跳における助走歩数と跳躍距離の増加パターンを決定する要因. 日本コーチング学会第22回大会特別論文集, pp. 46-47, 2011.
- ・木野村嘉則, 天野秀哉, 田渕舞, 関子浩二. ジュニア選手の走幅跳における助走歩数の増加と跳躍距離の推移の関係. 人類働態学会会報, No, 94, pp. 61-64, 2011.
- ・田渕舞, 木野村嘉則, 藤林献明, 曾田宏, 関子浩二. ハンドボールレフェリーにおける試合中の行動規範に関する研究. 人類働態学会会報, No, 94, pp. 65-67, 2011.

(その他)

- ・木野村嘉則, 小島正憲, 葛原憲治. DARTFISH を用いて算出した上肢および下肢関節角度の信頼性と妥当性 : 倒立動作の2次元動作分析を事例として. Strength & conditioning journal : 日本ストレングス&コンディショニング協会機関誌, 25(4), 12-18, 2018
- ・下嶽進一郎, 熊野陽人, 東中友哉, 松尾大介, 木野村嘉則, 松尾彰文. パフォーマンス向上のトレーニング測定合宿の事例 : 客観的データ・選手の主観・指導者の眼は一致するのか? Training Journal, Vol. 40 (3) , pp. 22-26, 2018.
- ・小嶋季輝, 木野村嘉則, 小山雄三. 多視点型教材の開発—「背面跳び」教材の3視点での試作—. 琉球大学教育学部教育実践総合センター紀要, Vol. 23, pp. 1-13, 2016.
- ・木野村嘉則. 走り幅跳びの技能学習の焦点はどこか. 体育科教育, Vol. 63, No. 3, pp. 18-21, 2015.

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

- ・平成30年度科学研究費助成事業若手研究申請—不採択
- ・平成29年度科学研究費助成事業若手研究申請—不採択
- ・平成28年度科学研究費助成事業若手B申請—不採択
- ・平成27年度笹川科学研究助成申請—不採択
- ・平成27年度大幸財団人文・社会科学系学術研究助成申請—不採択
- ・平成26年度科学研究費助成事業研究活動支援スタートアップ申請—採択

○所属学会

日本体育学会, 日本コーチング学会, 日本トレーニング科学会, 日本スポーツ教育学会, 日本教材学会, 日本体育科教育学会

○自己評価

研究テーマに関わる調査を行った。しかしながら論文の投稿が遅れている。

III 大学運営

○目標・計画

(目標)

所属委員会、大学および学内事業にて、情報の確認・把握をしっかりと行い役割を果たす。また、学外授業、出張授業に積極的に参加する。

(計画)

所属委員会（キャリア委員会、中高教職課程委員会、東邦STEP運営委員会、）やキャリアWGなど、大学および学内事業にて自身の役割を果たし、それぞれの場面に貢献する。

○学内委員等

キャリア支援委員会委員、東邦STEP運営委員会委員、中高教職課程委員会委員、男子バスケットボール部顧問

○自己評価

キャリア支援委員、東邦 STEP 運営委員、中高教職課程委員として関連業務についての確な遂行と審議への貢献を果たした。キャリア WG の一員としてキャリア科目の円滑な遂行に貢献した。

IV 社会貢献

○目標・計画

(目標)

研究成果を社会活動に活かす。学外授業などに積極的に参加し、専門分野を社会に広める。2014年3月から取り組んでいる瑞穂区のクラブチームでの小学生へのサッカーの指導を継続する。この際には、子弟を教育するは天に事うる職分であると捉え、広く社会に報告できる取り組みを目指す。

(計画)

所属学会にて研究成果の報告を行う。学外授業にて高校生と接する際には、スポーツ科学分野に興味を持てるような授業を心がけ、進路選択の一助となるよう取り組む。週に1~2回取り組んでいるサッカーの指導においては2018年度もアシスタントコーチとしてチームをサポートする。サポートに際して、専門分野の知見の提供を求められているため、子どもたちに伝わるように知見提供を行う。

○学会活動等

特になし

○地域連携・社会貢献等

出張授業 東邦高等学校

少年サッカークラブの指導

埼玉県の高校陸上部での依頼講演

○自己評価

出張授業においては生徒が実践しているスポーツ活動の方針を決定する際に、スポーツ科学が成果を出すためには大きな貢献を果たすことが伝わった。依頼講演は今年度2回行ったが、生徒の状況を鑑みて内容を精査し、知識が定着し活用できるよう演習形式となるよう形式の変更を提案して実施した。

V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

陸上競技の授業づくりや体育科教育学に関わる教員との情報交換会、近隣の陸上競技選手への講演などといった、近隣の大学教員と行っている私的な勉強会は自己研鑽に大きく貢献しているため、継続して役割を全うしていきたい。また、今年度は海外のクラブチームにてトレーニング遂行やコーチングについての取り組みを見学し、また参加者にて意見交換を行いプロコーチや研究者との交流を行って来た。新たな視点や、これまでの自身の取り組みの整理につながるため、今後も継続していきたい。

VI 総括

学内業務では所属委員会や学部での役割を果たし、一定の成果を挙げていると思う。一方で研究について論文執筆が遅れてしまい、論文投稿に比重を置く必要がある。

以 上